

## 本朝祖師伝記絵詞と一期物語

中 井 真 孝

### 一 はじめに

私は別稿『源空聖人私日記』の成立について<sup>(1)</sup>で、『源空聖人私日記』(以下『私日記』と略称)を醍醐本『法然上人伝記』(以下『醍醐本』と略称)および『本朝祖師伝記絵詞』(以下『絵詞』と略称)<sup>(2)</sup>と比較することによって、『私日記』は、従来は最古の法然伝だと考えられていたが、『醍醐本』中の「一期物語」や『絵詞』を資料とした二次的な法然伝であり、その成立は嘉禎三年(一二三三)ないし仁治二年(一二四一)を上限、康元元年(一二五六)を下限とする期間に求められることを考証した。この卑見が支持を得るなら、今までの法然伝の系統的関係は改めて考えねばならない。

そこで私は、法然上人(以下、尊称を略す)の伝記の大きな系統として、次の三つに分け、第一には源智系の「一期物語」で、別名「法然上人伝記」と呼ばれるが、実際は語録に近く、第二には信空・湛空系の『絵詞』で、別名『伝法絵』と呼ばれ、伝道用の絵巻物だが、その詞書は明確に伝記の体裁をとっており、整った伝記資料は本書をもつ

て嚆矢とし、第三には隆寛系の『知恩講私記』で、法然の墓堂にて遺徳を讃える詩文だが、伝記としては両者の中間的に位置している、と考えたのである。この三系統のうち、第一の「一期物語」と第二の『絵詞』を比較対照して、そこに内容・表記に共通の要素があるとすれば、この両書の成立的な前後関係を示唆するのか、あるいは両書に先行する伝記資料の存在を推測しえるのか、問題はさまざまな方向に発展してくると思われる。現在、定説化しつつある先学の法然伝研究に一石を投じたい。

## 二 内容の比較

かつて三田全信氏は『醍醐本法然上人伝』と『源空聖人私日記』の比較研究<sup>(3)</sup>を著し、「誕生の事」以下、「公胤夢想の事」までの二十七箇条にわたって内容を比較し、『醍醐本』と『私日記』の共通項目、および『私日記』の特殊項目をあげ、共通項目は『私日記』が『醍醐本』より取材あるいは引用していると考えられた。ところが別稿の単見によれば『私日記』の特殊項目は概ね『絵詞』を素材としているのである。したがって『醍醐本』との比較は『絵詞』において始めて意味をもってくると思われる。そこで三田氏の例にならって、『絵詞』と『醍醐本』の「一期物語」(その補足である「別伝記」も含む)とを比較してみよう。

### 1 誕生の事

『絵詞』第一段には「如来滅後二千八十二年、日本国<sup>癸</sup>人皇七十五代崇徳院長承二年<sup>丑</sup>美作国久米押領使漆間朝臣時国一子生ずるところ」とあるが、「別伝記」には「法然上人、美作州人也」とだけ記し、誕生の年、父の名には触れ

ない。

## 2 時国遭難の事

『絵詞』第三段には「保延七年<sup>西辛</sup>はるのころ、時国朝臣、夜打にあへる刻、ふかきぎずをかふむりて、いまはかぎりになりければ、九歳なる子に、われは此きずにて、空くみまかりなんとす、しかりと云て、敵人をうらむる事なかれ、(中略)然者一向に往生極樂をいのりて、自他平等利益をおもふべしといひおはりて、心をたゞしくして、西方界にむかひて、高声に念仏して、ねむるがごとくしておはりぬ。生年九歳なる子息、敵人の頭に、少箭をいたてける」とあつて、ことに中略した時国の遺言は詳しい。「別伝記」には「上人慈父云、我有敵、登山之後、聞被打敵、可訪後世<sup>云々</sup>、即十五歳登山、黒谷慈眼房為師出家授戒、然間慈父被打敵畢」とある。『絵詞』は夜打が保延七年(一一四二)、上人が九歳の時とし、敵に小矢を射たことを述べるのに対して、「別伝記」は夜打が法然の登山後のこととする。父の死と遺言が『絵詞』では出家の動機となり、「別伝記」では遁世の契機となつてゐるところが異なる点である。

## 3 観覺の弟子となる事

『絵詞』第四段には「同年のくれ、同国のうち、菩提寺の院主観覺得業の弟子となり給」とあるが、「別伝記」には「本国之本師、智鏡房<sup>本ハ山僧</sup>」とあつて、智鏡房は観覺のことで、入室の年は伝えない。

## 4 登山の事

『絵詞』第五段は「師匠の命によりて、比叡山にのぼるべきよし待ける時、乳房のはゝに、いとまを」申したこと、別離のさまを長々と書き、第七段に「初登山の時、ひさしの得業観覺の状云、進上 大聖文殊之像一体 天養二年<sup>丑乙</sup>月日 観覺<sup>上禪下顯光</sup> 西塔北合持法房<sup>禪下顯光</sup> この消息を披閱して、文殊像を相尋の処、生年十三の少人許をさきにたてゝ登」

とあり、しかも観覧の書状はその形式を留め、登山が天養二年（一一四五）、法然の十三歳の時とする。「一期物語」第一話には「或時物語云、幼少登山」としかなく、年次を限定できないが、「別伝記」には「上人十五歳、師云非直人欲登山、（中略）即十五歳登山、黒谷慈眼房爲師、出家授戒」とあって、十五歳の時、すなわち久安三年（一一四七）のこととする。ここにも両者の間に差異がある。ただし、『絵詞』にも「久安三年<sup>卯</sup>仲冬、出家受戒<sup>云々</sup>」とあって、出家授戒（受戒）の年は変わらない。

## 5 天台を学ぶ事

『絵詞』第九段には「肥後阿闍梨皇円に従て、天台六十巻誦畢之」とあるが、「一期物語」第一話は「十七年亘六十巻」、「別伝記」は「始談義於三所、謂玄義一所、文句一所、止観一所也、毎日通三所、依之三ヶ年亘六十巻畢」とある。天台三大部を学習したことは共に伝えるが、その開始の年齢は「一期物語」が十七歳とするだけである。

## 6 肥後阿闍梨の事

『絵詞』は三大部の学習のことに続いて、「件阿闍梨、弥勒下生の暁をまたんがため、五十六億七千万歳の間、遠江国笠原池に、大蛇となりてすまふべきよし、彼領家に申請て、誓にまかせて、死後即その池にすまふよし、時の人、遠近、見知するところ也」とあり、「一期物語」第三話には「或時物語云、当世人迷法門分際、云輒可解脱生死也、我師有肥後阿闍梨云人、智恵深遠人也、情願自身分際、今度不可解脱生死、若此度改生者、隔生即忘故定忘仏法歟、然受長命報待慈尊出世、大蛇は長寿者也、吾当大蛇、但若住大海者可有中天恐、依之遠江国笠原庄内桜池云池、取領家放文願住此池、死期乞水入掌中死畢、於彼池不風吹率大浪自起、排上池中塵、諸人作奇特、注此由申領家、勸其日比当彼阿闍梨逝去日時、有智恵故知生死難出、有道心故願値仏世、然而不知浄土法門故発如此意案」とある。表現に

精粗の差はあつても、内容は異ならない。

## 7 遁世の事

『絵詞』第十段は「久安六年<sup>庚午</sup>生年十八、はじめて黒合上人禪室に尋いたる。同上人いでむかうて、発心の由来を問給ふに、親父夜打のため早世せしより、この遺詞にまかせて、遁世のよし思たちける次第つぶさにかきくどき給ければ、さては法然具足の人にこそましますなれと待しより、法然といふ名は、のたまひける」とある。「一期物語」第一話は「十八年乞暇遁世、是偏絶名利望一向為学仏法也」とあり、十八歳の久安六年（一一五〇）に叡空のもとへ遁世したことを共に伝える。

## 8 学匠訪問の事

『絵詞』第十三段は、保元元年（一一五六）求法のために嵯峨の釈迦堂に参籠し、「然後、南都贈僧正藏順に法相宗を学し給ふに、其義甚妙にして、不可思議なりければ、師範かへて、上人に帰して、仏陀と称して供養をのべ給。中川少将上人随て、鑒真和尚の戒をうく。大納言律師寛雅に、三論宗を学し給に、その宗のおぎろをさぐり、弟子のかき心を達するに、かへて涙をながして、奥旨をきはむ」とある。「一期物語」第一話には「当初醍醐有三論先達、往彼述所存、先達惣不言、既而入内取出文櫃十余合云、於我法門無付属之人、已達此法門給、悉奉付属之、称美讃嘆傍痛程也、進士入道阿性房同道聞之云々、又往藏俊僧都許、談法相宗法門之時、藏俊云、非直人、恐大権化現歟、雖奉値昔論主、不可過之覚程也、智恵深遠事、言語道断、我一期有思延供養志云々、其後毎年送供物已果願望、凡毎値先達皆被称嘆」とあつて、法相宗は藏俊（順）、三論宗は寛雅を訪問したことは共通している。ただし「別伝記」によれば、「又華嚴宗章疏見立、醍醐有華嚴宗先達行決之、彼師云鏡賀法橋云、我雖相承此宗此程不分明、依上人開処々不

審云、依之鏡賀奉二字」と、二字を呈した四人の師匠に叡空・鏡賀・観覺・藏俊の名をあげ、華嚴宗の鏡賀を訪問したという。

## 9 浄土門に入る事

『絵詞』第十八段は「事のはじめは、高倉院の御宇安元元年（未）年（乙）齡四十三より、諸教所讃、多在弥陀の妙偈、ことにらうたく心肝にそみ給ければ、戒品を地体として、そのこゑに毎日七万遍の念仏を唱て、おなじく門弟のなかにも、をしへはじめ給ける。上來雖説定散兩門之益、望仏本願意在衆生、一向専称弥陀仏名、南無阿弥陀仏々々」とあり、浄土門に入った年次は安元元年（一一七五）四十三歳の時とし、所拠は湛然の『止観輔行伝弘決』の「諸教所讃」云々という句であつたとする。しかし、これは『絵詞』の作者が天台宗を意識したためで、この直後に、一見すると何の脈絡もないかのごとき感を与えるが、善導の『観經疏』付属釈の「上來雖説定散兩門之益」云々の句を掲げているのは、これが実の所拠であつたことを示唆している。一方の「一期物語」第一話は往生要集に対する「料簡」を述べた部分を引用して、かなり長文にわたっているが、それを受けて「往生要集為先達而入浄土門、闢此宗奥旨於善導二反見之思往生難、第三反度得乱想凡夫依称名行可往生之道理、但於自身出離已思定畢」とある。浄土門に入った年次は明らかでないが、所拠の章疏は善導の釈にあって、第十八話に法然は「善導観經疏付属文」に就いて浄土宗を立てたと答えられているから、「上來雖説定散兩門之益」云々の句であつたと考えられている。<sup>(5)</sup>

## 10 善導来現の事

『絵詞』第十九段は「唐善導和尚、もすそよりしもは、阿弥陀如来の御装束にて現じて、さまぐの事を、ときてをしへ給ける」と簡単だが、「一期物語」は第一話に「眠夢中、紫雲大聳覆日本国、從雲中出无量光、從光中百宝色

鳥飛散充滿、于時昇高山忽奉值生身善導、從腰下者金色也、從腰上者如常人、高僧云、汝雖不肖身弘專修念仏故來汝前、我是善導也云々」と描写がこまやかである。

## 11 大原談義の事

『絵詞』第二十二段は、発端は願真が大原に籠居中、永弁と出離の道を語り合い、法然を屈請して尋ねることになり、談義の場所は龍禪寺で、参加した者は明遍・願真・智海・静敵・覚什・証真・堯禪・静然・仙基・貞慶・藏人入道・蓮契・念仏房・湛數・印西・重源・源空の十七名で、その座列を図示している。談義の後、願真は三日三夜、持仏堂にて行道念仏し、これに三百余人の信男信女が参礼したとあり、また湛數が発起して来迎院・勝林院等で不断念仏を始めたともいう。なお第二十六段において、重源の東大寺大仏の勧進に当たり、願真は法華經の文字を阿弥陀仏の上に付け、その名号をもって結縁とすることを提案したという。「一期物語」は第二話に、願真が使者をつかわし法然と坂本で出会い、出離の道を尋ねたところ、法然から道綽・善導の意によって凡夫往生のことを教えられ、大原にこもって百日間、浄土の章疏を読んだ後、法然を招いたとあり、重源が弟子卅余人を率いて来たこと、法然の側には「東大寺上人居流」し、願真の側には「大原上人居流」したことを記すのみで、参加者の個人名は分からない。談義の後、願真は発願して五坊を立てて一向に称名し、また妹に念仏を勧めるために消息を書き、重源は道俗に仏号を唱えさせるために阿弥陀仏号をつけることを発案し、自ら南無阿弥陀仏と号したという。両書はともに大原談義の年次を明らかにしていない。

## 12 選択集の事

『絵詞』第三十七段に「同（元久）三年七月、吉水を出て、小松殿に移り給て、明月を詠じ給ける。（中略）権律師

隆寛小松殿参向の時、上人、御堂の後戸に出對給て、一卷の書を持て、隆寛律師の胸間に指入。依月輪殿之仰所撰選  
択集也」とあつて、隆寛が選択集を相伝されたことを記している。「一期物語」の第二十話には「或時云、汝有選択  
集云文知否、不知云由、此文汝可見之、我存生之間不可流布之由禁之故人々秘之、依之以成寛房本写之」とあつて、  
源智は成寛房の本を写している。

### 13 瘡病の事

『絵詞』第三十八段に「禪定殿下、上人、法印聖覚、同日同時、瘡心地し給事、おぼろげならずまし／＼けるあひ  
だ、殿下仰に、安居院を囑して、浄土の教文を講じて、弥陀本誓を解説せしめば、随喜の心をおこして、除病安寧の  
効驗もありぬべしと御評定ありて、道場を莊嚴して、称揚讃嘆はじまりければ、殿下、至誠心をいたし、上人、深心  
をふかくして、御導師、廻向発願の心をねんごろにし給ければ、三所に三心を具足して、一座に御帰依あらはれにけ  
りといふ事、末代の奇特、天下にひびくところ如件」とある。「一期物語」の第五話に「或時、上人有瘡病種々療治  
一切不叶、于時月輪禪定殿下大歎之云、我國絵善導御影於上人前供養之、此由被仰遣安居僧都許、御返事云、聖覚同  
日同時瘡病仕事候、雖然為御師匠報恩可勤仕、但早且可被始御仏事云々、自辰時始說法未時說法畢、導師併上人共瘡  
病落畢、(中略)僧都云、故法印下雨拳名、聖覚身此事尤奇特云々、世間人大驚生不思議思云々」とあつて、『絵詞』が兼  
実・法然・聖覚の三人が同時に瘡をおこしたとするのに対して、法然・聖覚の二人が瘡をおこし、善導の御影を供養  
したとする点が異なる。

### 14 遠流の事

『絵詞』第四十段に、顕密諸宗からの鬱訴を述べた後に、「遂源空門弟等、不思議を示て、仰咎於本師、遠流処らる。



（中略）かゝるほどに、小松殿に、靱かけられ給にけり。建永二年<sup>丙</sup>二月廿七日、還俗の姓名を給源元彦、配所土佐国」云々と記し、四十四段にまで、遠流の首途のこと、室泊の遊女のこと、地頭西仁のこと、善通寺参詣のことなど、詳細な記事が続く。「一期物語」は第六話に、法然が立てた一向専念義は偏執の義だとする誹謗に対して反論されたことを述べた後に、「当初依弟子過有被流讃岐国云事」とだけ記し、このとき一人の弟子に一向専念義を語ったところ、西阿はそれを諫めたが、「我雖截頸不可不云此事」といわれたとある。

# 15 公胤の事

『絵詞』第五十四段に「僧正公胤念仏破文を作て、種々難をもて、上人を非し給に、一々にくつがえして次第をのべ給に、条々会釈に、返て歸して、其罪障懺悔のために、中隱の唱道を望日、信空願文云、（中略）然後、はるかに五箇年をへて、建保四年<sup>丙</sup>四月二十六日夜夢に、聖人告云、往生之業中 一日六時刻 一心不乱念 功驗最第一 六時称名者 往生必決定 雑善不決定 専修定善業 源空為孝養 公胤能說法 感語不可尽 臨終先迎接 源空本地身 大勢至菩薩 衆生為化故 来此界度々」、第五十五段に「同閏六月廿日、種々の瑞相をしめして、僧正<sup>公胤</sup>十二<sup>公胤</sup>禪林寺の砌にして、往生の儀式、紫雲はるかに孤射山より、槐門よりみえて、太上天皇、院使をつかはし、准后宮、土御門の内大臣家より、かたゞ車馬をとばして、花洛辺土、人々耳目を驚し待りける」とある。一方、「一期物語」第十七話に「或云、上人在生時、三井寺貫首大式僧正公胤、作三卷書破選撰集名浄土決疑抄、其書云、（中略）上人見之、不見終指置云、此僧正此程之人不思、無下分際哉、（中略）使者字仏房還語此由、僧正閉口不言説、彼僧正来説法之次、被語於前決疑抄之由来、我今日臨此砌事、偏為懺悔此事也云々、聽聞道俗莫不随喜、其後、僧正同遂往生素懷畢、瑞相非奇特旁多云々」、「別伝記」に「三井公胤於殿上七ヶ不審問上人、（中略）公胤夢見云、源空本地身、大勢至菩薩、

衆生教化故、来此界度々々」とあつて、『醍醐本』は公胤が『浄土決疑抄』を著して『選択集』を破したこと、法然がこれを論難したこと、公胤が懺悔したことなどは詳しく、夢告と往生の瑞相は簡略している。

以上、十五項目にわたつて、『絵詞』と『醍醐本』の「一期物語」および「別伝記」を比較した。

### 三 法然伝系譜上の位置

まず前節で検討した結果を確認しておこう。(1) 誕生の事、(2) 時国遭難の事、(3) 観覚の弟子となる事、(4) 登山の事、(5) 天台を学ぶ事、(6) 肥後阿闍梨の事、(7) 遁世の事、(8) 学匠訪問の事、(9) 浄土門に入る事、(10) 善導来現の事、(11) 大原談義の事、(12) 選択集の事、(13) 癆病の事、(14) 遠流の事、(15) 公胤の事、の十五項目は、『絵詞』と『醍醐本』(「一期物語」「別伝記」に限る)がそれぞれに叙述する項目を共通にするということであつて、内容および表記が必ずしも一致することではない。これは何を意味するのか。従来の研究によると、三田全信氏は『醍醐本』↓『私日記』↓『絵詞』の順に、田村圓澄氏は『私日記』↓『醍醐本』↓『絵詞』の順に成立上の系譜関係を想定されている。たしかに『醍醐本』と『私日記』、『私日記』と『絵詞』とは、内容的にも表記的にも類似あるいは一致するところが多く、明らかに成立上の系譜関係を指摘しうるのであるが、私は『私日記』の成立を『醍醐本』や『絵詞』の後に置く考えをもっているので、三田氏や田村氏とは別の系譜関係を想定しなければならない。内容・表記等の一致という点では、『醍醐本』↓『私日記』、『絵詞』↓『私日記』という系譜関係は確定できるが、しかし『絵詞』と『醍醐本』との系譜関係は定かでないのである。

右の十五項目について、たとえば(6)肥後阿闍梨の事、(7)遁世の事、(10)善導来現の事、(15)公胤の事などは、表現に精粗の差はあれ、内容は概して変わらないから、そこに共通性を指摘することは可能であっても、その他の項目は年次・登場人物など伝記構成上に無視すべからざる相違点が存在するのである。そしてより重要なことは、『絵詞』『醍醐本』ともにそれぞれ叙述対象が一致しない項目の方が圧倒的に多いことである。かりに両書の一方が他方を引用もしくは参照していたとするなら、表現はともかくとして内容的に共通する項目がもっとあってしかるべきである。そこで私は、『絵詞』と『醍醐本』との間に成立上の系譜関係はないと結論せざるをえないのである<sup>(8)</sup>。ただ、『絵詞』は法然の行状を、『醍醐本』は法然の語録を中心に行っているから、両書に内容上の一致がなくてよいという考えもあるが、そういった伝記の性格的な違いを前提としても、両書の間に成立上の関連性を求めるなら、『醍醐本』と『私日記』、『絵詞』と『私日記』のごとく、それぞれの伝記記事の構成になお多くの共通点が認められるべきであると思われる。

卑見のように、『絵詞』と『醍醐本』との間に成立上の系譜関係はないとすれば、『絵詞』と『醍醐本』の両書は、十五項目にわたる叙述対象の共通にもかかわらず、一方が他方を直接に資料として用いていないことになる。いったい『醍醐本』は、所収の「一期物語」など六篇にそれぞれ原成立を想定し、それが法然滅後のかなり早い時期であったとしても、これが筆者の手元を離れて世に行われていたとは思われないから、他の法然伝に資料として使われることはなく、現存する形態で成立し、世に行われたのは法然の滅後三十年の仁治二年(一二四一)ころまで下がる、と私は考えている。また『絵詞』は、その序文に明記するのとおり、嘉禎三年(一二三三)の成立である。そうすると右述のとおり、両書のうち、一方が他方を資料とした可能性は十分に否定できるのである。したがって当初に予測した、

『絵詞』と『醍醐本』を比較対照して、そこに内容・表記に共通の要素があるのなら、この両書の成立的な前後関係を示唆するのとかという問題設定はついていたが、しかし、あるいは両書に先行する伝記資料の存在を推測しえるのかという問題は検討してみなければならぬであらう。

この両書より以前の法然伝としては、安貞二年（一二二八）書写の『知恩講私記』がある。前述の十五項目に関連するのは、第一讚「諸宗通達徳」で、

俗姓漆間氏美作州人也、生年三五春始年四明山、同年仲冬登壇授戒、習学法華宗、歲月雖不幾、具達文理殆拉宿老、十八歳之秋遁名栖黒谷、爾降一切経律論鑽仰忘眠、自他宗章疏卷舒無倦、此外和漢両朝伝記古今諸徳秘言、何不携手何不浮心乎、訪六宗洪才面々談義理、探諸家奥旨一々蒙許可、举世称智恵第一、宣哉誠哉、就中天台円頓菩薩大乘戒々鉢戒儀、相承在一身、天皇以下海内貴賤為伝戒師崇重異他、凡於顯密行業、修練尽力非名非利、唯為無上道也、然則本国明師還成弟子、黒谷尊師押為軌範、興福寺耆徳称仏陀展供養、東大寺長老為和上受円戒、智解拔群尤足敬重、夫雖明一代教法、限帰弥陀本願、憐濁世機為度愚惡也、若有自立我慢人、毆滅諸教得道、惑乱一宗正行、既背先師誠、敢不可依用、願分立行以之為要、謹守遺訓勿拘偏見、

とある。俗姓生誕地、比叡登山、授戒、天台修学、遁世、学匠訪問の事などは『絵詞』にも『醍醐本』にも見える。

「然則本国明師還成弟子、黒谷尊師押為軌範、興福寺耆徳称仏陀展供養、東大寺長老為和上受円戒」の記述は、どちらかといえば『醍醐本』に近いようであるが、「興福寺耆徳称仏陀展供養」は『絵詞』の「南都贈僧正藏順（中略）仏陀と称して供養をのべ給」に似ているから、両書と『知恩講私記』の関係はその一方に断定することはできないと思われる。そうすると、『知恩講私記』が『絵詞』や『醍醐本』とは別系統の法然伝に属しながら、伝記上の共通のこ

とがらを採っていると推測せざるをえない。より具体的にいえば、隆寛作の『知恩講私記』と湛空作の『絵詞』と源智見聞の『酬醒本』との間には、細部の相違はともかく大筋において、法然の伝記に関する幾つかの共通項があったことを示唆していると考えられるのである。

このことをやや詳しく検討していこう。まず次の三点の史料を見ていただきたい。

(一) 或時自鎮西来修行者、奉問上人云、称名之時、係心於仏相好事、如何様可候、上人未言說前傍弟子可然云々、上人云、源空不然、唯思若我成仏十方衆生称我名号下至十声若不生者不取正覚彼仏今現在成仏当知本誓重願不虚衆生称念必得往生許也、以我分際観仏相好、更非如説観、深憑本願口唱名号、唯是一事不仮令行也、修行者悦退出畢、(『一期物語』第七話)

(二) ある人問いていはく、称名の時心をほとけの相好にかけん事、いかやうにか候へき。答ての給はく、しからす、たゞ若我成仏、十方衆生、称我名号、下至十声、若不生者、不取正覚、彼仏今現在成仏、当知、本誓重願不虚、衆生称念、必得往生とおもふばかり也。われらか分齊をもて、仏の相好を観すとも、さらに如説の観にはあらし。たゞふかく本願をたのみて、口に名号をとなふる、この一時のみ仮令ならざる行也。(『和語燈録』巻五所収「信空上人伝説の詞」第六話)

(三) 上人御存生の時、西国の修行者申しけるは、仏の相好を常に心に懸て、念仏の数遍少なく申さんと、心は散乱て数遍多申候はんと、何れか勝れ候べきと。其時お前に候僧の云く、心に常に仏の相好を思ひて申さんこそめでたかるべけれ。上人宣く、源空は全くさは思はず、本願のむなしからず、称念せば必ず生るべしと思ふより外には、全く心にかゝる事なしと云々。(『閑亭後世物語』巻上)

右にあげた法然の法語は、(一)は源智が、(二)は信空が、(三)はおそらく隆寛が、それぞれ聞き伝えた法語で、ともにほぼ同じ内容である。『和語燈録』巻五に収める「諸人伝説の詞」のうち、「已上、信空上人伝説の詞、進行集よりいてたり」と明記する九話中、八話が『酬醒本』の「一期物語」にもほとんど同文で出てくるところから、望月信亨氏は、「一期物語」が今は散逸した『明義進行集』第一巻ではないかと一旦は疑われたものの、結局は『明義進行集』が「一期物語」からこれらの法語を粹抜したのであらうといわれる。<sup>(9)</sup>しかし、『義明進行集』の著者である信瑞は、信空にも隆寛にも師事しているので、これらの法語を信空より直接に聞き書いている可能性があり、しかも了恵は信空の伝える詞だと断じている。ことに前引の法語が隆寛の門弟の手になる『閑亭後世物語』にも載っていることからして、拠り所を「一期物語」に限定する必要性はないのである。というのは、第一に、かりに『明義進行集』が「一期物語」より抜粋したとしたら、その順序を変えずに引用するであらうが、『和語燈録』所収の「信空上人伝説の詞」と「一期物語」の法語の順番は一致しない。第二に、鎮西(西国)から来た修行者が、称名の時、心を仏の相好に懸けるのはどうかと法然にたずねた際、法然が答える前に、「傍ラノ弟子」(「お前に候僧」)が「然ルベシ」(「心に常に仏の相好を思ひて申さんこそめでたかるべけれ」といったことが(二)には落ちてゐるのは、ひょっとしたらこの弟子とは信空であったため、自己に不都合な所を故意に隠したとも思われる。要するに、鎮西の修業者と法然の問答を、その場に居合わせた弟子たち、たとえば源智・信空・隆寛らが各自その法語を書き留め、もしくは門弟に語り伝えたと推測するのは誤っているのだろうか。

こういった推測が蓋然性をもつなら、「一期物語」と「信空上人伝説の詞」に同じ法語が幾つかあるのは、源智および信空が法然の法話を、それぞれ別個に聞き書き伝えたことを示している。<sup>(10)</sup>系統を異にする門流間で伝わった法然

の法語に、内容・表記等の類似性が見出されるのは、決してそれらが資料引用の関係で生じた結果ではなく、法然自身が語った言葉を複数の直接の聴聞者が書き留め、あるいは聞き伝えた所産であることの証左であり、そこに微妙な差異があるならば、聴聞者による主観的な理解ないしは取捨選択、誤聞を現していると考えられる。それは法然の伝記においても同様なことが想定されるのである。その例を一、二あげると、『明義進行集』巻二、隆寛の伝に

元久元年三月十四日、コマツトノ、御堂ノウシロニシテ上人フトコロヨリ選択集ヲ取出シテ、ヒソカニサツケ給フコトハニイハク、コノ書ニノスル処ノ要文ハ、善導和尚ノ浄土宗ヲタテタマヘル肝心ナリ、ハヤク書写シテ披読ヲフヘシ、モシ不審アラハ、タツネ給ヘト、タ、シ源空カ存生ノ間ハ披露アルヘカラス、死後ノ流行ハナムノコトカアラムト、コレヲモチカヘリテ、隆寛ミツカラフテヲソム、イソキ功ヲオエムカタメニ、三ツニヒキハケテ、尊性昇蓮ニ助筆セサセテ、オナシキ廿六日ニ書写シテオハテ、本ヲハ返書シテ、シツカニ披読スルニ、不審アレハ、カナラス上人ノ許ヘ参シテ、ヒラキ、然レハマサシク選択集ヲ付属セラレタルモノハ隆寛ナリト云々、

という。隆寛が選択集を相伝された様子は、『絵詞』第三十七段に

同（元久）三年七月、吉水を出て、小松殿に移り給て、明月を詠じ給ける。小松とはたれかいひけんおほつかな雲をさゝふるたかまつのを。権律師隆寛小松殿参向の時、上人、御堂の後戸に出対給て、一卷の書を持て、隆寛律師の胸間に指入。依月輪殿之仰所撰選択集也。

とあって、表現は似ている。隆寛の選択集付属のことは、おそらく信空・湛空系の人々の知るところであったと考えられる。また「タ、シ源空カ存生ノ間ハ披露アルヘカラス」と法然が生存中の披露を禁じたことは、「一期物語」第

## 二十話に

或時云、汝有選撰集云文知否、不知云由、此文汝可見之、我存生之間不可流布之由禁之故人々秘之、依之以成覺房本写之、

とあつて、源智もそれを聞き及んでいたと思われる。この三書は、それぞれ記事の重点の置き方は異なるが、あえて共通項をもとめるなら、それは隆寛などごく少数の弟子が選撰集を付属され、弟子たちの間で密かに書写されていた、ということである。

## 『明義進行集』卷三、聖覺の伝に

元久二年八月ノ比、シラカハノ二階坊ニシテ上人瘧病ヲシイタシテ、コマツトノヘカヘリ給、又門弟等オノ／＼アヒカタテイハク、イサ念仏ヲ申シテ、オトシタテマツラムトイフヒトモアリ、上人ノ御房ハ、カ、ルホトノモノニハ、ワレラカチカラカナハシ、若シ又俗例ノ為ニマイレルカトイフ人モアリ、九条禅定殿下、此事ヲキコシメシ、サハキテノタマハク、吾レ案シタリ、善導ヲ図絵シタテマツリテ、上人ノマヘニシテ供養シタテマツラムト、スナハチ託麻法印証賀ウケタマハリテ、コレヲカキ進ス、後京極殿ソノ銘ヲアソハス、聖覺御導師ニ参勤スヘキヨシオホセラル、オホセニヨリ翌日弘暁ニコマツトノニ参入シテ、マウシタマウ、聖覺モオナシク瘧病ノ事候カ、シカモケフハヲコリヒニテ候、何時ハカリヲコラセヲハシマシ候ヤラムト、上人コタヘテイハク、申時ハカリニヲコリ候ナリト、聖覺ハマタイクヲコリ候ナリト、サルホトニ九条殿ヨリ、善導ナラヒニ布施等ヲクリツカハシタリ、イソケ／＼トテ、香花灯明ト、ノヘテ、ミノハシメニ登礼盤、サルノオハリニ下座、六ヲコリトイフヒニアタリテ、サハヤカニヲチ給、又自嘆シテイハク、先師法印カ降雨、聖覺カケウノコト、第一ノ高名ナリ



ト云々、見聞ノ道俗随喜セストイフコトナシ、上人イハク、ケフノ御説法コソ、真実ニ貴ク候ツレ、一心ニ聴聞シ、候ヒツルニヨリテ、オチ候スト云々、

とある。癡病のことは、既述のように『絵詞』『一期物語』ともに出てくるが、善導の図絵を供養したこと、聖覚の説法の内容などからすると、むしろ「一期物語」に近い印象をうける。しかし子細に比べると、説法の時刻が「一期物語」は辰の時から未の時までとするのに対し、『明義進行集』は巳の時から申の時までとし、また「一期物語」は「導師併上人共癡病落畢」というが、『明義進行集』は聖覚の癡病が落ちたとはいってない。こういう相違を考えると、必ずしも『明義進行集』が「一期物語」に依拠しているとは断言できないのである。聖覚が法然のために修した癡落としての祈禱の座に信空・隆寛・源智ら常随の弟子たちが祇候し、その修法を目の当たりにして、ことの経緯をつぶさに知っていたのであろう。したがって湛空の『絵詞』、源智の「一期物語」、信瑞の『明義進行集』に、あるいは簡略に、あるいは詳密に、それぞれ別個に——資料引用の關係なく——記載されていたと思われる。

いささか冗長になったが、私のいわんとする所は、法語の場合と同じく、法然の事績や回顧譚を直接に見聞した門弟らが各自で書き留めたり、門流の者に語り伝えていった結果、系統を別にする伝記として成立していったと推測されること、成立時代の接近する幾つかの伝記に記事の内容・表記等に何らかの共通・類似点があっても、それは後続の伝記が先行の伝記を資料として用いたことにはならず、伝記の成立上の系譜關係を示さないことである。従来の研究では、複数の伝記の間に記事の内容・表記等の共通・類似があると、ともすれば少しでも成立が早いと見られる一方の伝記を原形と考え、その後に成立した他方の伝記はそれを継承して記事を作ったと決めがちであった。この既成の、しかし根拠の希薄な思い込みが、法然伝の研究方向を左右してきたのなら、われわれは反省しなければならない

と思われる。特に『絵詞』については、ほとんどの研究者は「一期物語」ないしは『私日記』の影響下に成立したと説き明かして来た。こういった通説に疑問をもって私は、『私日記』については、「一期物語」や『絵詞』を資料とした二次的な法然伝であることを考証した。そして今、『絵詞』と「一期物語」（「別伝記」も）との間には成立的な前後関係は見出されないことを考証したのである。

右のように法然伝の成立事情を想定するとき、現在のところ、『絵詞』と『醍醐本』（「一期物語」「別伝記」）が資料として依拠した単独の伝記は見当たらないのである。<sup>(1)</sup>結局は、源智系の『醍醐本』『一期物語』『別伝記』、信空・湛空系の『絵詞』、隆寛系の『知恩講私記』の三書が、互いに独立して原初的な位置を占めていることになる。

#### 四 おわりに

私は『絵詞』の法然伝としての史料的价值を高めることにいささか終始してきた嫌いがあるように思う。最後に言及しておきたいのはこの点についてである。三田全信氏がその著『成立史的法然上人諸伝の研究』において、「この伝が先行の『醍醐本』、『私日記』、『知恩講私記』に見えない新資料を加えて、成立していることは明らかで」あるといい、その新資料による記事として、（一）嵯峨釈迦堂の参籠の事、（二）仁和寺法親王、上人を致請の事、（三）三尊常来の事、（四）勢至円通の文と影像の事、（五）「往生要集」御進講、真影を写さしめ給う事、（六）後白河法皇御菩提のため念仏礼讃を行った事、（七）聖護院無品親王静慧、上人に往生の要を問い給う事、（八）清水寺説戒の事、（九）清水寺勧化に帰依した人人の事、（一〇）尋常なる尼女房勧化の事、（一一）汝好持是語の文の事、（一二）熊谷

入道蓮生の事、(一四) 東大寺勸進職辞退の事、(一五) 観経曼荼羅(及浄土五祖・善導画像)の事、(一六) 小松殿の詠の事、(一七) 七箇条起請文の事、(一八) 天台座主に送られた起請文の事、(二〇) 遠流の途に着き給う事、(二一) 大納言律師公全、上人の船を待つ事、(二三) 室泊の遊女化益の事、(二四) 讃岐国塩飽に着き給う事、(二六) 讃岐小松庄の生福寺に留錫の事、(二七) 摂津国勝尾寺留錫の事、(二八) 上人往生を夢に見る人人、(二九) 葬送中陰の事、(三〇) 嘉禄の法難の事、(三一) 隆寛に「選択集」付属の事、(三二) 上人德行総結の事、の二八箇条を挙げている。<sup>(12)</sup> このほか、『四巻伝』にのみあって、他の法然伝には全く稀少の記事」として、(一) 弟子能信に説法された事、(二) 聖光が四国九州教化の事、(三) 上人説戒後念仏弘通の事、(四) 大谷禅房定生房の後任を定仏と定めた事、の四箇条を挙げている。そして、私は『絵詞』と『私日記』の關係を三田氏とは逆に考えているので、三田氏が『私日記』の特異記事として挙げる(四) 法華修行の事、(五) 華嚴披覽の時蛇が現われた事、(六) 上西門院説戒の事、(七) 三密修行の瑞相の事、(八) 光明照室の事、(九) 靈山寺別時念仏の時瑞相出現の事、(一〇) 頭光踏蓮の事、(一一) 高倉天皇御得戒の事、の八箇条は『絵詞』が初出となろう。

実に(四)箇条にも上る記事が、『醍醐本』にも『知恩講私記』にもない『絵詞』特有の記事なのである。ただし、このうち「法華修行の事」「三尊常來の事」のごときはほとんど文体をなさず、「聖光が四国九州教化の事」は追記の疑いがあり、<sup>(13)</sup> 問題の個所も存する。また「小松殿の詠の事」で小松殿へ移られたのは元久三年七月とするが、『明義進行集』によると、元久元年三月に隆寛へ選択集を付属されて、元久二年八月に聖覚が瘡落としての祈禱を行っているから、法然の小松殿移住は遅くとも元久元年のことで、歴史的には正しい記述とはいえない。とりわけ第十三段の「学匠訪問の事」の中で、「中川少将上人随て、鑒真和尚の戒をうく」は従来から疑問視されている。伊藤祐晃氏は、

天養元年（一一四四）に入滅した実範から当時十二歳の法然が受戒するはずはなく、『醍醐本』『別伝記』に「其後智鏡房自美作州上洛、上人奉二字、但真言宗中河少将阿闍梨受之」とある、真言宗を中川少将阿闍梨より受けたのは智鏡房（観覚）であるという但し書きを、『絵詞』の作者湛空が法然に係る文と見誤ったのみならず、さらに私見を加えて、法然が鑒真和尚の戒を受けたと改めたものであるという<sup>(14)</sup>。伊藤氏の論断は『醍醐本』と『絵詞』の前後関係を規定する重要な決め手として、その後の研究者に継承されて行き、田村圓澄氏のごときは『醍醐本』成立の下限を『絵詞』撰述の嘉祿三年（一二三三）<sup>(15)</sup>に置いている。だが、『絵詞』の作者が『醍醐本』を見ていた（資料として用いた）という徴証は他になく、かりにそうであったとしても、「中川小将上人随て、真言宗をうく」と誤ってしかるべきで、それを湛空が私見を加えて改作したとするのは穿ちすぎだと批判せざるをえないのである。唐招提寺に入って律宗を興した実範の相承者から小乗戒を法然が受けたと、湛空が誤聞ないしは誤解しているとも考えられよう。

従来から指摘されていた『絵詞』の記述に関する若干の問題点それ自体は、決して『絵詞』全体の史料の信憑性をそこなうような致命的な欠陥ではなく、まさに瑕疵というべきであろう。しかし、「浄土宗」とか「専修念仏」といった法然の真骨頂を現す言葉が一度も出て来ない『絵詞』を法然伝として尊重できるのか、といった根本的な懷疑はなお研究者の胸中をよぎるのであろう。この点すこし補足しておきたい。別稿「専修念仏停止と法然上人伝」<sup>(16)</sup>でも触れたが、『絵詞』は、延暦寺衆徒による法然の大谷墓堂の破却、隆寛・成寛・空阿らの配流、念仏者余党の逮捕、選択集印版の焼却などが打ち続き、専修念仏者は京中より四散して、浄土宗は壊滅状態に陥った嘉祿の法難を目撃し、無懺の思いを深くした湛空が教団の存立を賭けて「先師上人念仏をすゝめ給える由来」を叙述したのであり、そのため旧仏教なかならずく天台宗を激昂させぬようにあえて意識した法然像を描がいたと思われる。われわれ史学の立場にい

る者は、こうした背景のもとで施された諸宗協調あるいは天台宗的な色彩の修飾を除去して、法然の伝記の第一等史料として扱うのが当然の責務であろう。すなわち法然伝研究において、『絵詞』の史料的评价をこれまでより高められるべきだというのが私の結論とするところである。なお、本稿で言及しなかった各段個々の記述に関する信憑性は別の機会にゆずりたく思う。

〔注〕

- (1) 中井真孝『源空聖人私日記』の成立について『仏教文化研究』二九号
- (2) 『本朝祖師伝記絵詞』は善導寺本の外題である。第三巻の内題には『伝法絵流通』とあり、善導寺本の異本とみなされる専修寺本(高田本)には『法然上人伝法絵』と題し、新出の『国華』第七〇五号掲載本(国華本)には『伝法絵流通』と題するから、『伝法絵』または『伝法絵流通』が原題であろう(井川定慶『法然上人絵伝の研究』第二章第一)。しかし、この比較研究で用いるのは完本として残存する善導寺本であるから、今は便宜的に外題の名称にしたがう。
- (3) 三田全信『醍醐本法然上人伝』と『源空聖人私日記』の比較研究『佛教大学研究紀要』三四号
- (4) 中井真孝『専修念仏停止と法然上人伝』『法然浄土教の総合的研究』所収
- (5) 梶村昇『浄土宗立教開宗の文について』『仏教文化研究』二七号
- (6) 三田全信『成立史的法然上人諸伝の研究』二 法然上人伝記『三 源空聖人私日記』五 本朝祖師伝記絵詞
- (7) 田村圓澄『法然上人伝の研究』第一部第三章
- (8) 藤堂恭俊氏は「各種法然上人伝に引用されている法然の詞」(『佛教大学研究紀要』四二・四三合巻)において、『伝法絵流通』(『絵詞』)が『私日記』『醍醐本』の両書の下に作られたという従来の学説に立ちながらも、『伝法絵流通』中の法然の詞は『醍醐本』『一期物語』に出拠をもつ詞を一つも引いていないと指摘されているが、これは卑見のごとき考えに立てば、ごく自然に理解できよう。さらに同氏は、『伝法絵流通』の作者自身が法然より直接に聴聞したと推測される。
- (9) 望月信亨『信瑞の明義進行集と無観称名義』『浄土教之研究』所収
- (10) 藤堂恭俊氏は「諸人伝説の詞について」(『鷹陵』一五号)において、「勢観房源智に關係のあるこれら両書」(『一期物語』)とそ

の異本たる『浄土随聞記』に、信空所伝の宗祖の詞が収められているということ、(中略)源智は常随給仕首尾十八箇年といわれる師であるから、信空と同席して宗祖の詞を直接聴聞したとも、また源智は宗祖晩年の門弟であるから、早くから宗祖の門弟であった信空から折にふれて聴聞したとも考えられる」という。

(11) ただし、法然のある時期に限った特殊事績に関すること、たとえば法然自身の宗教体験や入滅の様子を叙述した『醍醐本』所収の「三昧発得記」「御臨終日記」のごときは存在していたと思われる。本文にいう「単独の伝記」とは、そういった特殊個別の著作物を指さない。

(12) (一) 沙弥随蓮夢想の事、(一九) 住蓮・安楽の事、(二二) 經の島に着き給う事、(二五) 讃岐松山へ立寄り給う事は、高田本を採用しているから除外する。なお、善導寺本と高田本の校合による祖本の推測は別の機会にゆずる。

(13) 中沢見明「法然諸伝成立考」『真宗源流史論』所収

(14) 伊藤祐晃「法然上人と実範阿闍梨」『浄土宗史の研究』所収

(15) 注(7)に同じ

(16) 注(4)に同じ

# 〔付記〕

本稿は、浄土宗奨学会の昭和五十九年度研究助成による研究の成果報告である。